

くから一点が出土した。また、SX八六〇一からも削屑の細片二点が見つかっているが、釈読不能である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 秦人マ□

〇九一

四周のいづれも原形をとどめない、長さ六・五mm幅一・一mmほどの削片である。墨書は二行にわたっている。上部には一文字分の余白がある。右行は、文字の左端がわずかに残っているのみで、判読できない。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報

一九八七年度

(第一分冊)』(一九九〇年)

(鶴見泰寿)

奈良・下田東遺跡

所在地 奈良県香芝市下田東三丁目

2 調査期間 五位堂区画第五次調査 二〇〇五年(平17)六月

九月

3 発掘機関 香芝市教育委員会

4 調査担当者 山下隆次・福田由里子

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 繩文時代～近世

7 調査地は馬見丘陵の南西端、西流する葛下川に北流して合流する

調査地は馬見丘陵の南西端、西流する葛下川に北流して合流する

支流が形成した沖積低地に位置する。五位堂駅前北第二

土地区画整理事業に伴つて二〇〇一年から継続して

調査を行ない、二〇〇六年三月末までに三五七〇〇m²の調査を終了した。その結果、全長二一mの帆立貝式古墳や飛鳥時代から平安時



(大阪東南部)

古墳や飛鳥時代から平安時

代にかけての掘立柱建物、室町時代の環濠居館などを検出し、各時代にわたる大量の土器類のほか、木製鞍（五世紀前半）や墨書き人面土器・土馬、石帶などが出土した。

木簡は、調査地のほぼ中央に位置する調査区（H地区）の一辺約1m、深さ約1mの方形の井戸から一点出土した。井戸の埋土は大体三層に分けられ、上層から斎串一点、中層から今回の木簡のは

か土師器甕四点と斎串八点、下層から須恵器壺三点、土師器甕二点、土師器杯二点（うち一点に墨書き「左カ」がある）、及び斎串二点が出土した。これらの土器の年代から、木簡は平安時代初頭（九世紀初頭）に廃棄されたと考えられる。なお、井戸の周辺からは掘立柱建物が数棟検出されている。

8 木簡の积文・内容

(1) 「

・「

『 小支石上日七月□
十日十四□十七日□
小支石田苑五日役又』

壳□前□十一
本貝二百八十
魚
前壳年魚六十
魚此壳
後壳百六十
魚此壳
家壳■五十
■又□十□□□□
岡案告万呂□
□
□
□□七月□□
□□
□□
□□

・「

『和世種三月六日

小須流女十一日蒔『臨偪臨位別

伊福部連豊足解 中進上御馬事

於『□□持

『種蒔口』

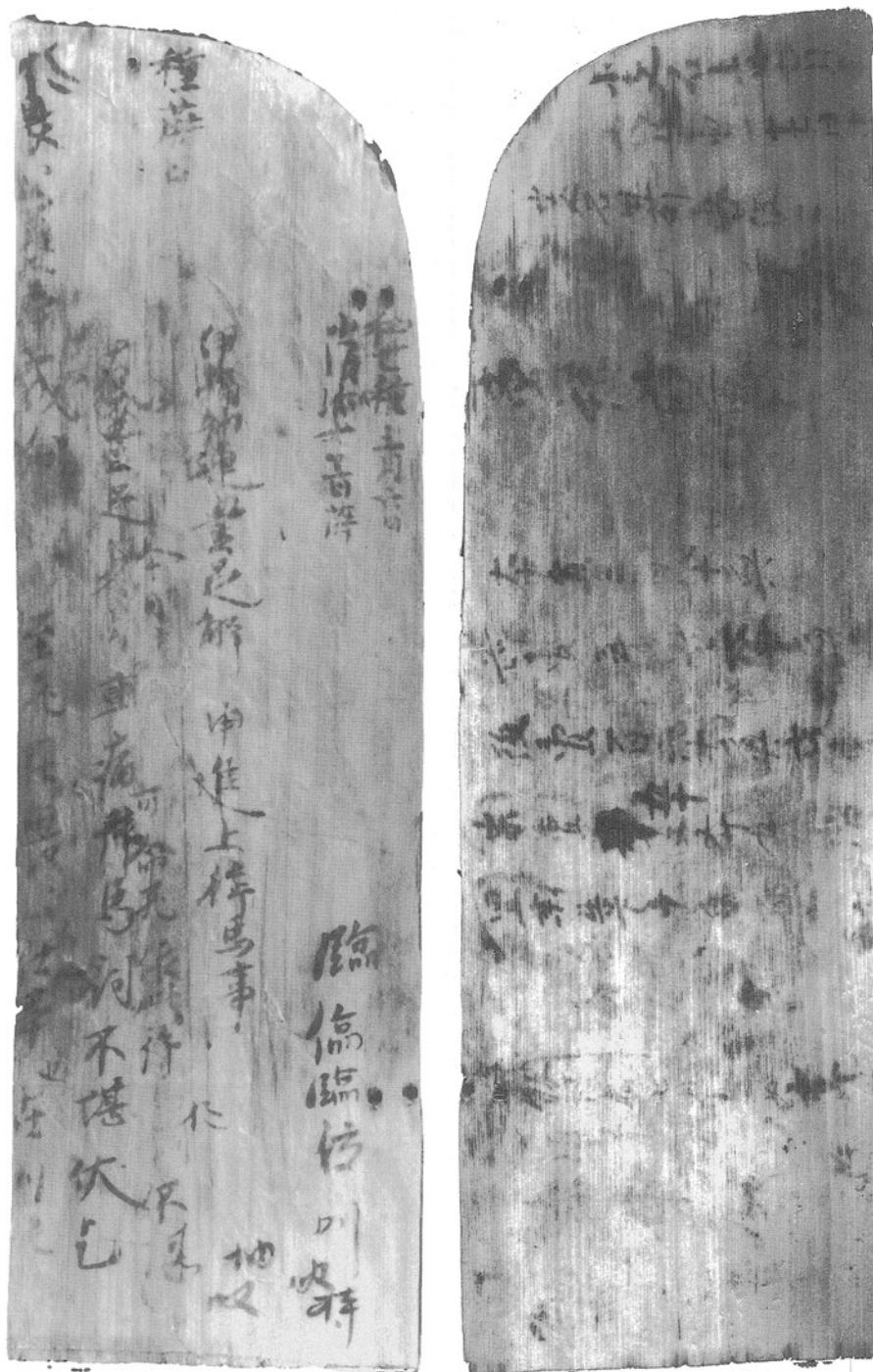
以右依豊足『今日□可命死依此御馬飼不堪

重病御馬飼不堪伏乞

於畏公不仕奉成命『至死在礼畏公不仕奉也

在□□

2005年出土の木簡



(赤外線撮影)

短辺の一方が隅丸の長方形で、長辺（二カ所）と短辺（一カ所）に穿孔されていることから、容器の底板であったと推測される。樹種はヒノキ科アスナロ属である。内容などから少なくとも二回にわたって書かれていると考えられ、まず、種蒔日など農業に関するものと何かの売却記録、そして次に、裏面の大部分を削つて伊福部連豊足の解文の下書きと考えられるものが書かれている。全面に墨痕が看取できるが判読できない文字が多く、詳細については今後の課題である。

なお、訛読みにあたっては、京都教育大学の和田萃氏、奈良県立橿原考古学研究所の鶴見泰寿氏のご教示をいただいた。また、木簡学会研究集会において多くの会員の方々からご教示をいただいた。

（山下隆次）

「平城京木簡三」に、千字文を習書した木簡が二点（五一〇号・五一〇四号）ある。いずれもSD五三〇〇西端のJD一九地区出土で、左京二条二坊五坪（推定藤原麻呂邸）から廃棄されたものと考えられる。この二点はともに「秋收」とすべき部分を「収秋」と記す。他には誤記は確認できない。廃棄元・出土地が共通する二点の木簡で、同様の誤記がある理由は何か。

一つには、同じ人物が誤記した可能性があろう。彼はどうしてもその部分を「収秋」と書いてしまった。もう一つには、同じテキストを写した結果という可能性があろう。元のテキストが「収秋」で、それを写した習書も同様になってしまった。

どちらの蓋然性が高いか、俄には決めがたい。筆跡は比較的似ているが、丁寧な文字で癖が乏しい分、同一人物の文字か判別しがたい。ただ、前者の場合も、習書に用いたテキストは同一であろうから、「収秋」と記したテキストが存在した可能性も残る。

なお、比較的近接した東二坊大路西側溝からは「秋收」と書かれた木簡が出土している（『平城宮発掘調査出土木簡概報』一三、一〇頁上段）。

（馬場 基）